

10) 金丸哲宏, 北川常広, 加藤弘巳, 矢野三郎, 浅沼克次: ゲンタマイシンの酵素免疫測定法とその応用, 第18回臨床化学シンポジウム, 1978. 12, 大阪.

### 3. 原 著

1) 森本靖彦, 花崎信夫, 宮武明彦, 中尾皖英, 野間啓造, 八倉隆保, 山村雄一, 有末一隆, 立花暉夫, 矢野三郎: 慢性疾患ステロイド治療時の副腎皮質機能抑制に及ぼすステロイド製剤の種類, 投与量, 投与方法の影響について, 日本内科学会雑誌. **67**: 57-68, 1978.

2) Nakao, K., Noma, K., Sato, B., Yano, S., Yamamura, Y. and Tachibana, T.: Serum prolactin levels in eighty patients with sarcoidosis. *European J. of Clinical Investigation*, **8**: 37-40, 1978.

3) 加藤弘巳, 矢野三郎, 浅沼克次, 金丸哲宏, 若松英樹, 北川常広: ペニシリンの酵素免疫測定法. 臨床化学シンポジウム **17**: 91-95, 1978.

4) Kitagawa, T., Kanamaru, T., Wakamatsu, H., Kato, H., Yano, S. and Asanuma, Y.: A new method for preparation of an antiserum to penicillin and its application for novel enzyme immunoassay of penicillin. *J. Biochem.* **84**: 491-494, 1978.

5) 植村泰三, 藤井隆, 中尾皖英, 浅沼克次: 原発性甲状腺機能低下症に伴った乳汁漏出無月経症候群. 日生病院医学雑誌 **6**: 115-124, 1978.

6) 山村雄一, 国府達郎, 上田英之助, 矢野三郎, 森本靖彦, 小西池稜一, 山本実, 柏村茂, 吉田茂: 内科領域の不眠症治療に関する研究. 治療 **60**: 1035-1038, 1978.

### 4. 総 説

1) 矢野三郎, 浅沼克次, 藤井隆: 免疫異常とカリクレイン・キニン系. 日本臨牀 **36**: 2922-2926, 1978.

2) 矢野三郎: 内分泌機能の遺伝的障害——分泌異常と受容体異常——代謝, **15**: 735-742, 1978.

3) 矢野三郎: 主要医薬品の副作用: 副腎皮質ホルモン剤について, *MEDIC* **13**: 13-16, 1978.

4) 矢野三郎: ステロイド療法の問題点, *ミノファゲン・メディカル・レビュー* **23**: 233-243, 1978.

5) 浅沼克次, 植村泰三, 中尾皖英, 藤井隆: 女性ホルモンと免疫, 日生病院医学雑誌 **6**: 1-15, 1978.

6) 植村泰三, 藤井隆, 中尾皖英, 浅沼克次: ペ

プチドホルモン産生細胞とAPUD系細胞の概念, 日生病院医学雑誌. **6**: 17-30, 1978.

### 5. 著 書

Kitagawa, T., Kanamaru, T., Kato, H., Yano, S. and Asanuma, Y.: Novel enzyme immunoassay of three antibiotics. New methods for preparation of antisera to the antibiotics and for enzyme labelling using a combination of two heterobifunctional reagents. *Enzyme Labelled Immunoassay of Hormones and Drugs*. ed. by S. B. Pal, p.59-66, Walter de Gruyter & Co., Berlin. New York, 1978.

### 6. その他

1) 矢野三郎: 尿崩症, 薬の知識 **29**: 21, 1978.  
2) 矢野三郎: 高コレステロール血症など約50項目, 医学大辞典, 南山堂, 1978.

## 内 科 学 (2)

教 授	杉 本 恒 明
助 教 授	水 村 泰 治
助 手	浦 岡 忠 夫
助 手	寺 田 康 人
助 手	高 田 正 信

### 1. 研究概要

1978年における教室員各自の研究活動の内容は以下の如くである。

杉本: ①不安定狭心症の臨床 (成人病学会シンポジウムその他で発表), ②左室収縮時間の基礎と臨床 (脈波学会総会特別講演), ③ヒトの心臓の電気生理学的性質とそれに対する薬物作用 (世界心臓学会その他にて発表), ④心室細動の発生要因に関する実験的研究 (現在進行中)。

水村: ①急性尿細管壊死の乏尿期および利尿期における小分子タンパクの動態 (腎臓学会西部会発表予定), ②急性尿細管壊死の回復期の水・Na再吸収能 (現在進行中)。

浦岡: ①僧帽弁閉鎖不全における解剖学的異常と機能的異常の関連 (臨床心音図研究会, 循環器学会北陸地方会で発表), ②杉本の課題④を共同で研究中。

寺田: 体表面心臓電位分布図法による心筋梗塞の梗塞部位と血管病変の局在との関係 (現在進行中)。

高田: ①実験的腎血管性高血圧の成因 (国際腎臓学会発表), ②本態性高血圧患者におけるNa 排泄

能(国際腎臓学会発表), ③アンジオテンシンIIアナログテストと治療効果(腎臓学会西部会発表), ④浮腫性疾患患者におけるレニン・アンジオテンシン・アルドステロン系(現在進行中)。

## 2. 学会報告

1) Sugimoto, T., Ishikawa, T., Kaseno, K., and Nakase, S.: Electrophysiological properties of diltiazem in man., The 8th World Congress of Cardiology, Sept., 1978, Tokyo.

2) Takata, M., Shimao, M., Uno, D., Arai, S., Takabatake, T., Nomura, G., and Hattori N.: Effect of  $\beta$ -blocking agents on blood pressure and plasma renin activity in two kidney Goldblatt hypertensive rabbits., The VIIth International Congress of Nephrology, June, 1978, Montreal.

3) Shimao, M., Takata, M., Arai, S., Uno, D., Takabatake, T., Nomura, G., and Hattori, N.: Exaggerated natriuresis in hypertension. The role of blood pressure, renin and plasma volume., The VIIth International Congress of Nephrology, June, 1978, Montreal.

4) Nomura, G., Arai, S., Uno, D., Shimao, M., Takata, M., Takabatake, T. and Hattori, N.: Effect of propranolol on renal circulation and sodium reabsorption., The VIIth International Congress of Nephrology, June, 1978, Montreal.

## 3. 原著

1) 杉本恒明, 石川忠夫, 紮野謙介: 下行性に完全HVブロック, 逆行性に過常期性と思われるHA伝導を示した1例. 臨床心臓電気生理 1(1): 69-73, 1978.

2) 杉本恒明, 石川忠夫, 紮野謙介: 心房周期の変化に伴う心房エコー帯の変化. 臨床心臓電気生理 1(2): 1-4, 1978.

3) 木田寛, 安部俊男, 飯田博行, 友杉直久, 西村邦雄, 浅野喜博, 藤岡正信, 土肥和紘, 中本安, 水村泰治, 服部信: 検診における尿タンパク陽性例の実態について. 内科 41(4): 664-668, 1978.

4) 沼哲夫, 大城康彦, 余川茂, 稲坂暢, 服部信, 浦岡忠夫: 心エコー図よりみた非対称性心筋肥大の形態とベクトル心電図との関係. J. Cardiology 8(3): 305-312, 1978.

5) 大城康彦, 池田孝之, 余川茂, 稲坂暢, 服部信, 浦岡忠夫: ペースメーカー植込み患者の中隔異常運動の発生様式——心エコー図とベクトル心電図との対比——. J. Cardiology 8(3): 341-348

1978.

6) 野村岳而, 高畠利一, 荒井志郎, 宇野伝治, 嶋尾正人, 高田正信, 服部信, 黒崎正夫: 本態性高血圧症に対する $\beta$ -遮断薬(tiprenolol)の使用経験. 診療と新薬 15(10): 2529-2533, 1978.

7) 野村岳而, 宇野伝治, 高畠利一, 荒井志郎, 嶋尾正人, 高田正信, 服部信: 高血圧症の血漿レニン活性および循環血漿量と治療効果. 診断と治療 66(5): 845-849, 1978.

8) 野村岳而, 高畠利一, 荒井志郎, 宇野伝治, 嶋尾正人, 服部信, 土肥和紘: 本態性高血圧症に対する血管拡張薬(ecarazine hydrochloride)と $\beta$ -遮断薬(pindolol)の併用療法. 診療と新薬 15(4): 891-895, 1978.

## 4. 総説

1) 杉本恒明: 心不全の治療, (3)動脈圧コントロールの意義. 呼吸と循環 26(1): 70, 1978.

2) 杉本恒明: 心不全におけるうつ血の要因. 呼吸と循環 26(3): 244, 1978.

4) 池田孝之, 杉本恒明: 心性浮腫. 循環器科 3(5): 341-345, 1978.

4) 杉本恒明: 電気的除細動. 日本臨牀 36(増刊): 2070-2071, 1978.

5) 杉本恒明, 渡部秀人, 藤木明, 黒崎正夫, 紮野謙介, 石川忠夫, 中瀬真一: 不安定狭心症の概念. 日本成人病学会誌 4(2): 16-18, 1978.

6) 杉本恒明: 発作性頻拍症の内科的治療. 内科 42(1): 59-63, 1978.

7) 寺田康人, 杉本恒明: 不整脈の臨床・薬物療法. 現代医療 10(8): 993-998, 1978.

8) 杉本恒明: 房室ブロックの薬物療法. メジチーナ 15(12): 1782-1783, 1978.

## 5. 著書

1) 杉本恒明: 心弁膜症, p. 46-49, 阿部裕編, 薬物療法の実際. アサヒメディカル 1978.

2) 杉本恒明: 発作性頻拍(上室性・心室性). 山田和生編: 最新心電図ベクトル心電図学, 495-512頁, メディカル出版, 1978.

3) 杉本恒明: 動悸と不整脈. 高木誠編: 心臓病の診かた——問診から診断まで, 26-29頁, 日本チバガイギ長音 1978.

4) 杉本恒明: 抗不整脈剤, 高安正夫編: 薬剤学講座II, 200-209頁, クリニックマガジン, 1978.

5) 杉本恒明: 心房ペーシング試験. 水野康編: 循環器負荷試験法——理論と実際——, 260-273頁, 診断と治療社, 1978.

6) 浦岡忠夫, 杉本恒明: 遅効性亜硝酸剤いわゆ

る冠拡張薬。河合忠一編：狭心症，111—115頁，116—127頁 金原出版，1978。

7) 浦岡忠夫，杉本恒明： $\beta$ -遮断薬の作用。織田敏次編：内科セミナー，不整脈，173—196頁 永井書店，1978。

## 6. その他

1) 杉本恒明：病態生理学研究の在り方。呼吸と循環 26(5)：411，1978。

2) 杉本恒明：心臓ペースティング試験の経験から。心臓 10(11)：1121—1122，1978。

# 内 科 学 (3)

助 教 授 井 上 恭 一

## 1. 研究概要

### 1) 肝炎ウイルス研究の現況

最近1年間において肝炎ウイルスの研究は格段の進歩を遂げた。すなわちA型肝炎についてはA型肝炎ウイルス(HAV)に対する抗体の検索が行なわれることが可能となり，従来非B型急性ウイルス肝炎とされていた症例のうち，かなりの部分がA型肝炎と確診されることとなった。B型肝炎の抗原抗体については従来よりHBs抗原抗体，HBc抗原抗体，HBe抗原抗体の3系があることが明らかにされ，それぞれの意義についての検討がなされて来た。とくに最近ではHBe抗原抗体系が重要視され，HBs抗原陽性肝疾患の中で，HBe抗原陽性例ではその肝組織病変が高度であること，またB型肝炎ウイルス(HBV)の感染性を示す指標として重要であることなどが指摘されて来た。一方HBe抗原とともにHBV増殖の指標としてDNAポリメラーゼ活性値(DNAP)も検索されるようになり，我々の教室においても慢性肝炎の経過中DNAPの高値を示す症例で，急性増悪を示す例が経験され，ウイルスの増殖と肝病変の進展との間に関連があることが明らかにされた。

肝炎の治療に関してはインターフェロン，およびそのインデューサー，トランスファーファクターなどに関心がもたれているが，これらについては今後の研究課題と考えられる。

### 2) アルコール性肝障害研究の現況

昨年の研究概要でも述べた如く，アルコール性肝障害の成因についてはアルコールによる直接的な肝障害作用のほか，飲酒に伴う栄養障害，免疫異常あるいは我々が以前より述べて来たHBV感染の加重があげられる。かかる観点から昨年度はアルコール

性肝障害の成因と病理について再検討を加え，日本肝臓学会東部会のパネルディスカッションにおいて発表した。

## 2. 学会報告

井上恭一：アルコール性肝障害の臨床と病理(パネルディスカッション)，日本肝臓学会東部会，1978，10，松本。

## 3. 著 書

井上恭一，佐々木博，市田文弘：慢性肝炎の特殊診断法——肝生検。内科Mook No.3：38—39頁，1978。

## 4. その他

1) 井上恭一，柴崎浩一，田代成元，市田文弘，佐藤巖：塩酸チアラミドの肝機能におよぼす影響について。薬理と治療 6：2559—2565，1978。

2) 市田文弘，井上恭一：膽道疾患診断の進歩特集・黄疸——内科領域——。臨床と研究 55：2356—2359，1978。

3) 市田文弘，井上恭一：老年者疾患の処方集・肝障害。老年医学 16：1530—1531，1978。

# 精 神 神 經 医 学

教 授 遠 藤 正 臣  
助 教 授 中 村 一 郎  
助 手 細 川 邦 仁  
助 手 稲 生 暁 春

## 1. 研究概要

臨床神経心理学的研究：失語・失行・失認という神経心理学的症状のそれぞれのsub-typeを原因疾患や他の基本的精神症状(痴呆・健忘など)とのかわりから再検討する。そのためにはまず症例の蓄積が第一であり，個々の症例の示す症状の精密な記述・分析を意図している。

図形・文字の認知機構に関する研究：図形や文字の認知における大脳半球優位性の問題を，タキストスコープを用い研究する。さらに対象をpolyglotとし，その大脳半球優位性にも考究をすすめたい。また，動物の視覚連合領とパターン認知に関する実験も準備中である。

臨床脳波学的研究：各種神経疾患での臨床脳波を継時的な視点をもって研究する。症状の推移・諸種検査結果と対比し，脳波のもつ臨床経過記述での優位性と限界について検討する。

神経病理学的研究：剖検例から得られた変性・脱髄性・炎症性疾患の中樞神経系について組織病理学的に検索している。特に多発性硬化症は多数の症例